

心残りなく死ぬために、私は署名のない美しい言葉を宙に残して死にたい

Greatchain

February 15, 2025

先日テレビで見た新しい「忠臣蔵」の一場面に、切腹までのひと時を過しながら、浪士の一人が、「死装束もいただき、美味しいものまでご馳走になって、我らはちょうど腹の切りごろじゃのう」と言って、同志を笑わせる場面があった。

私も 91 歳となり、「腹の切りごろ」となった。そして浪士と同じように、私も自分ほど精神的に贅沢をした人間はないと思っている。これが偽りのない本音である。ただ彼ら浪士たちはこの世に名を残して死ぬが、私は「選ばれた者」として神に愛された分だけ、最後まで名を残すことを拒否した人間として、死にたいと思っている。

これは自己処罰などではない。私は繰り返し、「有名人」の仲間入りだけはしたくない、と言ってきたが、その理由をはっきり説明したい。私は有名人や著名人に恨みがあるわけではない。「恥ずかしがり屋」というだけである。しかも、こんな人が思いもつかない理由で、思いもよらぬ名誉や名声にあずかるとしたら、顔から火の出る思いがするのである。要するに「やめてくれー」ということである。それに私のプライドというものがある。

しかしこれを拒否するためには、私は自分のアイデンティティを消し去る必要があった。これは一種の自殺で、いわば武士の切腹であり、世間一般に対してはウソをつくことにもなる。これは今までずっと、恐ろしく苦しいことでもあった。しかし今やっと「手放す」ということができるようになった。これは「プレアデス星人」から教育された結果である。つまり俗世間の名声のようなものに対する未練を断ち切ることで、そのことによって別次元の魂の世界に飛躍することを教えてくれたのは、この異星人たちである。

ただ、もう一つ困ったことがある。それは私に巨額の報償金(?)を与えるという申し出(知らせ)が、絶え間なくあることである。ただしこれは、一度も実現したことがない。誰かが拙宅を訪ねてくるという話も実現したことがない。これは私を騙し墮落させる策略なのか、本当の話なのか、いまだに分からない。私は今、特にカネに困ってはいない。しかしギリギリの生活をしている。もし、わずかでも援助してくださる篤志家がおられるなら、喜んで頂戴する。

このあたり、何がウソで何が本当なのかわからないが、私がかんりの「敵」に囲まれているのは確かなようである。こうしたことはすべて YouTube から教えられている。「お前の息子は今夜死ぬぞ」というような脅迫まで受けているが、たいていは何も起こらないので、驚かなくなった。しかしこれは私が、神や守護者に守られているからだ、という自覚だけは忘れないようにしている。そして、私を弱らせて亡き者にしようとする敵があるということは、**私と神が一体となって発する力が、現実に効力をもっている**、ということなのだ と解釈している。

私が「選ばれた者」であることを自覚するようになってから書いたものは、そう多くはないが、それでもそれは、かんりの霊力をもっているものと理解している。間違いなく、何か奇跡のようなことが起こっている。これは YouTube の記事から間接的にわかる。「あなたの IQ は 200 だ」とか「あなたは神に近い完全な存在だ」などと言っているのは、なぜだろうか？ また、そもそも私はここ数年ほとんど人と接触していないのに、これほど多くの人々（男女）が、ラブレターを呉れるのはなぜか？ これは私にもわからない。しかしこんな経験をした者は、多分私以外にいないだろう。**奇跡とか神秘としての純粋な愛がこの世に存在する。**

これは宗教ではない。少なくともこれまでのキリスト教のような宗教でなく、今起こっている新しい時代の要求に呼応する霊的革命だと思われる。私に反対する人々は、私を非常識として「破門」しようとするだろう。しかしその常識は私に対しては通じなくなった。

実はこうしたことのすべては、前に「自伝」に書いたように、私の生涯でたった一度だけ就寝中に起こった「美」の体験からきている。そのとき私は大声をあげて飛び起きた。そして「美のアイデア（美そのもの）」というものが実在することを、このとき知った。その時以来、今日まで、私の「美のアイデア」に取り憑かれている。「善」について書くときも、それが根底にあった。宗教は私の性には合わない。

私を芸術家と呼んでくれる人は少ないが、本質は芸術家だと自覚している。私の書いた 30 篇余りの英語のソネットまたはソネットまがいの作品は、前にその一篇を紹介したように、すべて厳密な形式に従っている（私は自由詩は書けない）。そしてこれを書いているときには、必ず何者かが私を捕らえている。

ここで、一度どこかで書きたいと思っていたことを、書くことにする。それはゲーテの詩「野ばら」Heidenröslein についてである。これは、ゲーテが自分の生涯で最高の作品と自負していたものだが、その内容は、野外での婦女暴行というおぞましいものである。彼はこの人間の業とも言うべき行動を、最高に美しい野ばらに託して、見えないように表現し

た。それは、Leiden（悩み、苦しみ）に耐えなければならないという、最後の行に現れている。これは人間が生きている自然界そのものの、美しくかつ悲しい表出である。

なぜ私がこれにこだわるかと言えば、これまでずっと私の「自伝」で述べてきたように、幼児期以来の私という人間の核をなしているものが、「この宇宙の無限の悲しみと無限の美しさ」だからである。こんなことは私事には違いないが、これが神の一部として、今、人々に影響を及ぼしている。

私はあとしばらくは、神が生かしてくれるものと予測しているが、ここ十年近くも前から、陰に陽にこのブログの中心問題であったことを述べるなら、トランプとプーチン両大統領の会談によって、我々はとりあえず大きな山は越えたと思う。これは両者の**密談**でなければならない、外交交渉であってはならない。